

# 中田かわら版 7 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会

協力：中田連合自治会 泉区役所

制作：中田かわら版制作編集委員会

横浜市踊場地域ケアプラザ

## ■この人に会いたい 〈79〉

### 中田の蕎麦打ち会の師匠はマルチ人間

堤 勇二さん 中村町内会

中田の住人でつくる「いずみ中田の蕎麦打ち会」というのがある。中田かわら版令和 3 年 4 月号で取り上げられているから多くは述べないが平成 31 年（令和元年）設立以来ずっと続いている。本号では二代目の師匠、堤 勇二（つみ・ゆうじ）さんを紹介する。

団塊の世代の堤さんは千住生れだが、中学から都電で御徒町まで通った。子どもの頃は図工が得意だったが勉強好きが高じて工学を専攻し大手電気会社に就職した。

業務は宇宙関係ひと筋であって最後は当時世界最大の直径 20m 級の宇宙アンテナの開発に携わるという幸運にも恵まれた。JAXA 宇宙科学研究所での経験は人格形成に大きく関わったようだ。第二の職場ではカーナビに使われる日本版 GPS 衛星（現在の「みちびき」）の企画提案を行なう電機メーカー連合所帯に誘われ希有な経験もしている。紙面の都合で中身は割愛するが、近年活発な自動運行システム開発は「みちびき」あってこそその技術だ。堤さんはこの経験を誇りに思っている。



ところで 蕎麦との出会いは 20 年ほど前に遡る。川崎市で生粉（きこ）打ちと言ってつなぎを



脱穀作業

全く使わない 100%そば粉の手打ち蕎麦に出会った。その魅力を手に入れようと教室に通ったのが始まりのようだ。道具を揃え意気込んだものの仲間も減っていき中断してしまったが一方で料理教室や薬膳等、はたまた詩吟・俳句・楽器等にトライ。コロナで中止になるまで十数年ほど勉強した由。そのころ中川地区センターで（みそば会）と言う同好会に出会い、仲間と切磋琢磨して今日に至っている。5 年ほど前、縁あって冒頭掲げた中田蕎麦打ち会の師匠になった。さらに月一で近くのサロン宮ノ前テラスの昼食に蕎麦を提供しながら、泉寿荘では

「そば教室をはじめ世界の文化を学ぶ「杖の会」を主宰。フォトクラブ、読書会、英米文学を学ぶ会やヨガ教室の会員にもなっている。アメイジング！

蕎麦打ち会は 7「月に畑を起し 8 月に種まき、以降刈入れから製粉 まで行い 11, 12 月幾度かのそば打ちの時が師匠の本番であるが、この師匠はそば畑の空いた期間に蕎麦の会の他のメンバーと共にジャガイモや玉葱その他野菜も育てている。驚くなかれ自宅の裏でも畑作をやっている。マルチの源は有り余る好奇心を補う体力・気力・知力の塊と感じた。近年の女性会員の増加は優しく教える師匠の容貌に有るかなと思う。

（河内満明）

# 「富士山大爆発はあるのか」（上）

宮田 貞夫

最近 3 月末から 4 月上旬の新聞の見出しから、気になった 2 本のニュースがあった。富士山降灰「自宅待機」、30 センチ以上で首都圏の交通大混乱。南海トラフ死者 29 万人。地震被害想定 292 兆円。と、まあこんな具合である。今回は、いま騒がれている富士山の噴火についていろいろな資料から考えてみたい。富士山は過去 5600 年間に約 180 回の噴火を繰り返してきたが宝永 4 年（1707 年）の噴火を最後に 300 年以上、活動していない。富士山が大規模な噴火をすると溶岩流などの被害が及ぶが、人口が密集している首都圏にも大量の降灰が見込まれる。風向きにもよるが大体 3 時間後に東京、神奈川県など広範囲に降灰が積もる。わずかでも鉄道は地上の運航を停止、雨が降ると 3 センチ以上でバイクが、10 センチ以上で車も走行不能になる。東京電力管内の 40 万世帯が停電し首都圏の上水道施設の 83% で水質が悪化したりする。交通のストップは食料はじめ日用品不足を招き生活が困窮する。以上は内閣府の有識者検討会の報告の概要だが、事態はもっと深刻になるかもしれない。



## <古富士火山と新富士火山>

箱根火山はまだ活動を続けているが愛鷹山 10 万年ほど前にすでに活動を終えている。このころ、小御岳火山の中腹で新しい火山が噴火を開始。爆発的な噴火、山体崩壊を繰り返し岩片や火山灰の混合物、泥流を大量に流し小御岳や愛鷹山の一部を覆って古富士火山になった。古富士火山は 2700m の高さまで達した。一方、およそ 1 万年から 5000 年前に古富士火山の噴火が大量の溶岩を出す様式に変わり山頂から古富士山を飲み込むように噴火を開始、ほぼ現在の姿、高さの新富士火山が作られた。

## <富士山の 3 大噴火>

- ① 「延暦の噴火」（延暦 19 年、800～802 年）平安時代のはじめ
- ② 「貞観の噴火」（貞観 6 年、864～866 年）平安時代
- ③ 「宝永の噴火」（宝永 4 年 12 月 16 日、1707 年 江戸時代

宝永大地震（宝永 4 年 10 月 28 日）から 49 日後、富士山の南東側から激しい噴火が始まる。M8・7 の巨大地震であった。噴火は 16 日間続き噴煙は上空 1 万 m に達した。火山灰は関東一円に広がった。

※参考資料 『富士山大ばくはつ』（小峰書店）、別冊宝島『世界遺産 富士山』、「毎日新聞」『日本史要覧』（文英堂）。

## 編集後記

スマホを持ちウォーキング。季節の花々に目を見張る時がある。何の花？とスマホを取り出しグーグルを選択、カメラマークをクリックしてパチリ…検索結果が出る。中田中央公園で 4 月から 6 月に見られる黄金色の「キンラン」の花。育てるのが難しいと言われている品種で絶滅危惧種とすぐ解答してくれる優れたもの。子どもや友人たちから使い方を教わり、ようやく使えるようになった。ウォーキングが楽しくなるスマホである。

松本純子

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会

委員長 宮田貞夫 編集長 松本 正

編集委員；小島敏子、田中 進、河内満明、松本純子、鈴木賀津彦、嶋 宏之